

学級で心を育む「お絵かき遊び」(V)

—養護教諭による小学1・2年生への実践例—

佐田 和美¹⁾・新谷りつ子²⁾・松本 裕子³⁾・岡田 珠江⁴⁾

学級で子どもの心を育むことを目指し、筆者らは「お絵かき遊び」を開発し、実践を積み重ねている。

本稿においては、小学校1・2年生の学級担任から「お絵かき遊び」の要請をうけ、養護教諭が行った実践を報告する。「お絵かき遊び」の取り組みは、小学校低学年においても子ども達が自分の心と向き合うことができる方法で、子ども達が気持ちを自由に絵で表現し、それを子ども達が認め合うと同時に教師にも認められる体験になった。小学校では、学級担任が1人で学級の子どもの問題を抱えてしまいがちな傾向があるが、養護教諭と協働して実施することで、多面的に子どもの姿を見ることができ、学級指導・学級経営を行う上で役立つものであった。また、養護教諭が実施したことで、学校生活に馴染むまで不安の多い低学年の子ども達と養護教諭との関係作りが早期にでき、養護教諭や保健室が子ども達にとって心理的に近い存在になった。

キーワード：「お絵かき遊び」・描画療法・養護教諭・学級担任

I はじめに

筆者らは『学級で心を育む「お絵かき遊び」』の研究を続けている（岡田・松本，2007；松本・佐田ほか，2007；松本・岡田ほか，2009；佐田・新谷・岡田，2009）。これは、通常なんらかの問題行動を既に引き起こした子どもを対象として臨床心理士等が、相談機関や医療機関等において、個別にまたは小集団に行っている心理療法（特に遊戯療法や描画療法）を応用し、学校の教育活動の中に適合するよう開発した手法である。これまでの研究では①教師と子どもの間に信頼感が生まれる、②これを基盤にして潜在的に指導を必要としている子どもの発見と、その子どもとの関係作りに役立つ、③学級集団に肯定的変化が現れる等、いくつかの成果を得ている。

小学校1・2年生の子どもたちは、学校生活に馴染めず不安を抱えたり、言葉で上手く自分の気持ちを伝えられずトラブルを起こしたりすることが多い。また、友だちを上手く作れず一人である子も少なくない。このように、一人ひとり違う子どもの様子を学級担任は理解し、指導しているが、自分の指導が適切かどうか不安になる時もある。この時、養護教諭と一緒に子どもへの理解を深めることは、学級担任の指導の参考になることもある。

今回の実践は、共に子ども理解を深める手だてとして、学級担任から養護教諭へ「お絵かき遊び」実施の要請があり、継続的に実践したものである。

II 本研究の目的

本研究は、これまで小学校3・4年生を中心に学級で実施してきた「お絵かき遊び」を、小学校1・2年生の担任から「共に子ども理解を深めるために実施してほしい」との要請をうけ、養護教諭が行ったものである。小学校低学年に「お絵かき遊び」を実施する場合、とりわけ1年生に実施するには方法にどのような工夫をするべきなのか、また子ども達にとってどのような体験になりうるのか、「お絵かき遊び」の方法の吟味と効果の検証を目的とする。

具体的には、以下の点について実践した学年毎に分けて記述する。

- ①1年生で実施する方法
- ②子どもにとってどのような体験だったのか
- ③学級担任と共に子ども理解を深める手立てになるのか

III 小学1年生での実践

1. 方法

- (1) 対象 A小学校1年生4学級の児童
(男子43名 女子57名 計100名)
- (2) 実施者 養護教諭（学級担任は教室内に同席）
- (3) 実施期間 200X年5月～200X+1年3月
(8・9月は除く)
- (4) 実施時間・回数
朝学活後の10分間（2週間に1回）年間9～12回
- (5) 準備
①準備物

1) 名張市立つつじが丘小学校
2) 名張市立百合が丘小学校
3) 津市立南が丘小学校
4) 三重大学教育学部附属教育実践総合センター

- ・A4サイズの描画用紙「いまのきぶんをおえかきしよう」(後述 様式2・3・4)

- ・16色のパステル

②校内体制の整備

養護教諭が教室へ出向き、定期的に「お絵かき遊び」を実施するにあたっては、その時間保健室が不在になるので、緊急時の対応のため、職員会議で共通理解を図ると共に、保健室前のドアに居場所を明示することで、職員の協力を得た。

(6)「お絵かき遊び」実施の手順

以下に手順を挙げるが、具体的な教示法は岡田・松本(2007)を参照されたい。

- ①子どもたちは着席し、閉眼して心を落ち着け、1分間程度深呼吸する

(学級の様子をみて、閉眼はせずに実施)

- ②「今、ここで」感じている気分に着目し、思うがまま自由に描く

- ③可能であれば描画したものに題名をつける

(2学期より実施)

- ④描いた作品と自分の気持ちとを比較し、どの程度ぴったりした感覚があるのかを書き入れる

(3学期に実施)

(7)「お絵かき遊び」実施上の留意点

「お絵かき遊び」を始める際に、実施者は子どもたちへ大事なこととして次の4つのことを伝えた。①自由に描くこと(上手に描く必要はない)、②作品は大切に扱うこと、③描きたくない時は、描かなくてもよいこと、④時間を守ることである。

(8)感想の聴取

学期毎に「ふりかえりシート」を作成し、子ども達に感想を聞く。

(9)担任からの情報の聴取

担任への「ふりかえりシート」によるアンケートを実施するとともに、感想を随時聞き取り、児童の様子を聴取する。「お絵かき遊び」実施前、実施後にチェックリスト「学級での児童の様子」を使用し、子どもの様子を比較する。

(10)スーパーバイズ・事例検討

「お絵かき遊び」開発者の1人である、岡田より定期的に指導を受け、「お絵かき遊び」の取り組みの実態や、気になる子どもの心の理解についてスーパーバイズを受ける。

り細かい絵を描きにくいこと、作業に時間のかかることを考慮し、これまでに実施してきた「お絵かき遊び」に使用した描画用紙(様式1とする)の他に、3つの様式を準備した。

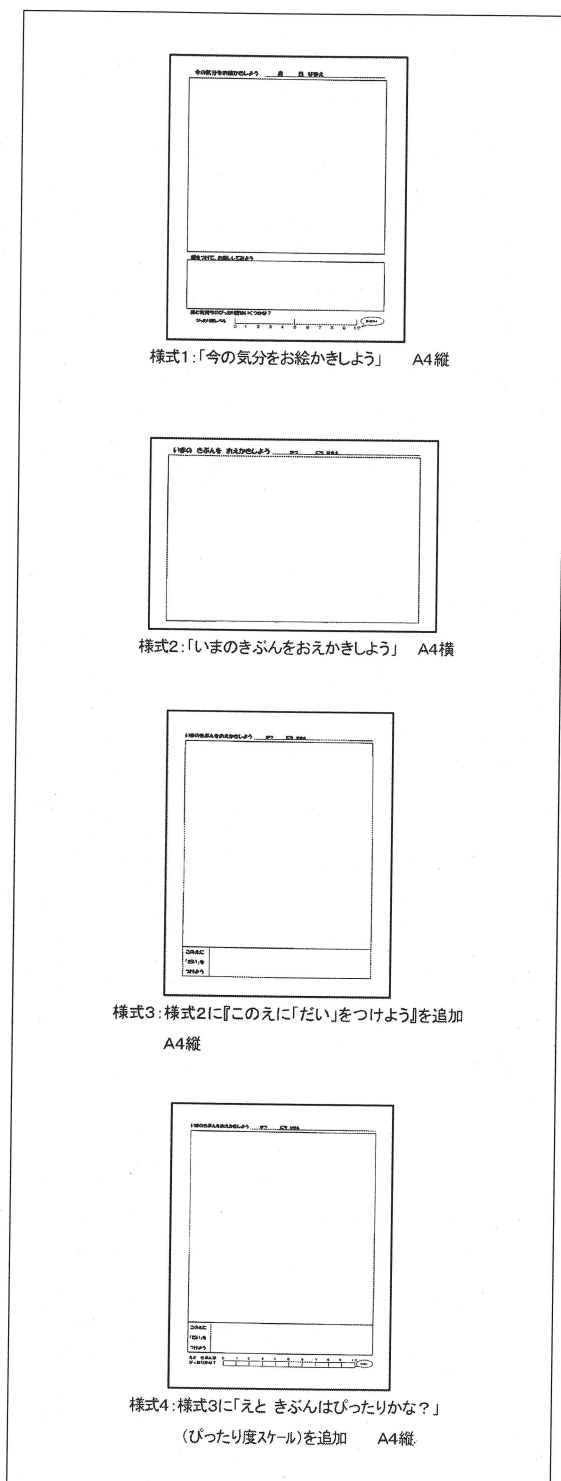


図1 「お絵かき遊び」の描画用紙

2. 方法に工夫をした点

(1) 複数の用紙を準備する

一般的に、1年生がすべてのひらがなの学習を終える時期が6月中旬であることや、手先の発達段階にかかわ

実践を始めた5月は、様式2を使用した(描画1)。そして、担任と協力し子ども一人ずつに、絵の内容や描いている時の気分について話を聞き把握した。子ども達のひらがなの学習が進むにつれて、絵の中に文字を書いて絵の説明をする子が出てきたので、2学期からは様式

3を使用した(描画2)。3学期、最後の時間には様式4を使用し、絵と気持ちについても考えることができるようにした(描画3)。

(2) 閉眼をせずに内省するための教示

「お絵かき遊び」のはじめに、「着席し、閉眼して心を落ち着け、1分間程度深呼吸する」ことを試みた。どの学年の子にも閉眼することに抵抗を示す子がおり、そのような時には、これまでの実践においても個人に無理をしないよう指示をして、不安を回避してきた。しかし、1年生にはその指示がうまく伝わらず、各クラスに数名不安定になり抵抗を示す子がいた。そこで、不安を解消するため、教示の内容を「ゆっくり息をして、自分の気持ちはどんなか、考えてみよう」とした。すると、静かに呼吸を整えながら、自分の気持ちに心を向けることができるようになった。子ども達のふりかえりの感想には、「自分で感じたことをもっと描いてみたい」「描いていると気分よくなった」などもあり、教示を変えて閉眼をしなくても、自分の心を見つめるという目的を達することができた。

3. 子ども達にとってどのような体験だったのか

(1) 「お絵かき遊び」実施時の子ども達の様子から

子どもたちの様子は、どの子も「お絵かき遊び」に積極的に、すすんで取り組む姿が見られ、描いている間に、その絵についてのお話を語りながら描く子がいたり、養護教諭や友だちとのかかわりや、会話を楽しみながら過ごしている子が多かった。

画材にクレパスを使うことも影響するのか、大胆に色を楽しむ子や、色を重ねた後の手触り感に興味を持つ子がいた。

(2) 子どもの感想から

各学期末にふりかえりシートを使って「お絵かき遊び」についての感想を聞いた。その結果は図2の通り、どの学期も8割以上の子が「お絵かき遊び」が「とても楽しかった」と答え、「楽しかった」と合わせると、9割の子が、楽しい時間を感じていたことがわかった。

「少し楽しくなかった」と回答した子の感想には、紙

の大きさを大きくしてほしいという希望や、描く時間をもっと長くしてほしいなどの要望が書かれていた。

学期末の「ふりかえりシート」には、自由記述で感想を記入できるようにした。感想は、次のような内容である。

「お絵かき遊び」に対する感想

- ・とてもいいきもちになりました
- ・じぶんの えのなかにはいりたいなとおもいました
- ・もっとかんじたことをかいてみたいです
- ・とてもきもちよさそうなえになりました
- ・うれしいきぶんになりました
- ・ちょっとわくわくしてかいている
- ・おうちでもしています
- ・おえかきをして じぶんのいらいらがすっきりする きぶんでした
- ・こんなたのしいおえかきをしたことがなかったです

実施者やクラスの友達への感想

- ・また せんせい といっしょにおえかきしたいです
- ・せんせいがきてくれてうれしかった
- ・いつも おえかき にきてくれてありがとう
- ・せんせい おえかきいっしょにしてくれてありがとう
- ・いつもせんせいがきてくれたから、もくようびが たのしみ になってきました
- ・またいっばいおえかきしようね
- ・みんなといっしょにしたからたのしかったです

資料1 「お絵かき遊び」の感想(子どもの記述通り、下線は筆者が追加)

以上のように、子どもたちの感想は、肯定的に捉えた記述が多かった。

これらのことから、子どもたちにとって「お絵かき遊び」の時間は、子ども達がのびのび自分の世界を楽しみ描く時間となり、その手法を家でも取り入れるようになるなど、気持ちを描くことを心地よく認識していることが見て取れる。これらのことは、筆者らが「お絵かき遊び」を開発した目的と、一致していることがわかる。

(3) 学級担任の感想から

学級担任からは、「お絵かき遊び」の取り組みについて、次のような感想があげられた。

- ・子ども達が楽しんでた
- ・ありのままの自分を出せるようになった
- ・子どものその時々のお気持ちの動きがわかる
- ・意外な面を見つけられた
- ・のびのび感じたことを描けるようになった
- ・すべてOKの感覚を持た
- ・絵を描くことに抵抗が少なくなった
- ・子ども達がよろこんでいるのがよくわかった

資料2 学級担任による「お絵かき遊び」の感想(自由記述)

質問: お絵かき遊びは楽しかったですか?

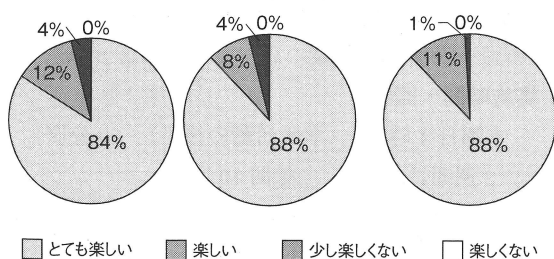


図2 「お絵かき遊び」の感想

また、学級担任に「お絵かきする日としない日で、クラスの様子はかわったと思いますか?」という質問をした結果、4クラス中3クラスの担任が「かわった」と答え、「どんなふうにかわりましたか?」との問いには、次のような記述があった。

- ・ほんわかした状態になったように思う
- ・1限目が元気。目覚めた感じがする
- ・リラックスしているように思う

資料3 「お絵かき遊び」でかわったこと (自由記述)

(1)～(3)から、子どもたちが「お絵かき遊び」の時間には自分を自由に表現でき、同じ体験を友達とも共有し、それを認めてくれる教師の存在を感じていることがわかる。このことから、「お絵かき遊び」が子どもと子ども、子どもと教師の関係構築においても有効に作用していることが、再確認された。

4. 学級担任と共に子ども理解を深める手立てになるのか

「お絵かき遊び」の時間、学級担任は教室に同席した。特に1学期間は、子ども一人ひとりに向き合い、絵の内容や思いを聞き取り記録しながら、絵を描く子どもの様子を観察し、子どもが絵について語る話に耳を傾けていた。「お絵かき遊び」を続けていると、普段の学習場面では見せない子どもの素顔が見えることもあり、子どもと一緒に「お絵かき遊び」の時間を共有することで、担任は子どもの心理的理解を深めることに役立つものになった。

また、「お絵かき遊び」の中で気付いた子どもの様子や、休み時間などに保健室でかわりをもった子について、養護教諭と学級担任との情報の共有や交流がスムーズにできたため、教室と保健室が連携して子どもの心理的支援を行うことができ、保護者や関係機関との連携にもつなげることができた。

5. 実践を通して気付いたこと

(1) 「じゅうがちょう」と「お絵かき遊び」の違い

小学1年生の子ども達は、入学時より「じゅうがちょう」を各自で持ち、休み時間や授業の課題を終えた後の時間に「お絵描き」をすることが多く、普段から自由に絵を描くことができる環境にある。そのような子ども達に「お絵かき遊び」を実施した場合、「じゅうがちょう」へのお絵かきとどのような違いがあるのかを観察した。

休み時間に教室で「じゅうがちょう」にお絵描きしている様子を見ると、鉛筆や色鉛筆を用いて「じゅうがちょう

う」に印刷されているキャラクターを描いている様子を見ることが男女共に多かった。しかし、「お絵かき遊び」は、子どもの感想にも「いろいろ考えてそれを描いているのがとても楽しい」などあり、自分で感じたり考えたりしたことを描こうとしていたことがわかった。

また、就学前の幼稚園・保育所などから課題画を描く経験を重ねている子どもにとっては、自由に絵を描くことへの戸惑いが見られた。就学前を家庭のみで過ごしていた子にとっても、自由に絵で遊ぶ経験は少なかったようだった。子ども達が絵を描いて遊ぶ時には、「じゅうがちょう」に描いていたような何かの模写であったりして、自由な発想から描く経験は少なかったとの声が聞けた。上手に描きたい(描かなければならない)といった思いの強い子は、「お絵かき遊び」の取り組みに慣れるまで少し時間がかかったが、1年生は他の学年に比べると、自由に遊ぶ感覚を早くつかんで楽しめるようになったと感じた。

(2) 養護教諭と子どもとの関係作り

入学したばかりの1年生は、生活科の学習の中の学校探検などを通していろいろな先生方と出会い、学びの場を広げていく。保健室にも、学校の教室の中の1つとして訪れ、その学習や健康診断などを通して養護教諭と出会う。しかし、月日を経て学校生活に慣れてきても、困ったときに自分から保健室を訪れる1年生は例年少なく、学級担任や上級生に付き添われてくることが多い。しかし、今回1年生の学級に養護教諭が「お絵かき遊び」に行くことにより、子ども達にとって養護教諭との距離を近く感じるようになったため、何かあった時に子どもが自分で判断して保健室を利用できる様子多くみられ、担任からも驚きの声があがった。

IV 小学2年生での実践

1. 方法

「お絵かき遊び」の実践手順は、原則としてⅢの小学1年生での実践と同様である。

- (1) 対象 B小学校2年生1学級の児童
(男子16名 女子16名 計32名)
- (2) 実施者 養護教諭(学級担任は教室内に同席)
- (3) 実施期間 200X年7月～200X+1年3月
(8月は除く)
- (4) 実施時間・回数
木曜日4時限(学級活動の後半) 20分間
(2週間に1回) 年間10回
- (5) 特記事項
用紙はⅢの実践様式3を使用し、描画には「だい」をつける。

2. 子ども達にとってどのような体験だったか。

(1) 子どもの感想から

2学期3学期末にふりかえりシートを使って「お絵かき遊び」について感想を聞いた。その結果、9割以上の子どもが「とても楽しかった」「楽しかった」と答え、楽しい時間だったということがわかった。

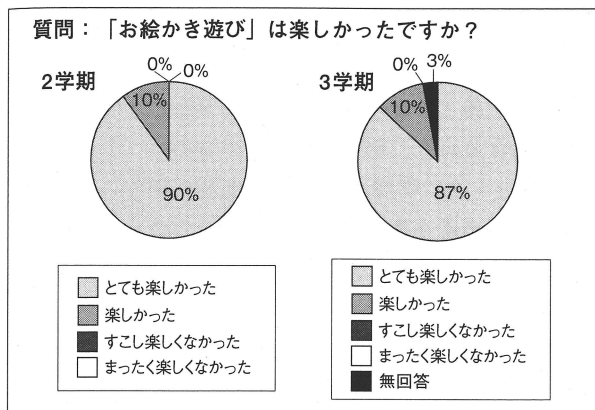


図3 「お絵かき遊び」の感想

「『お絵かき遊び』をしてどうでしたか？」の質問（自由記述）に対しては、次のような感想があった。

- ・絵をかいてすっきりしました。
- ・いろいろな絵をいっぱいえがけておもしろかったときやうれしかったときやたのしかったときがありました。
- ・お絵かきの時間になったら、何でもいよってゆってくれたから、じ分のおもっていることが、かけてうれしかった。
- ・いろいろな絵をかいて、まんぞくです。もっといろいろかきたいです。またできるといいなと思います。
- ・いろんな気持ちをそのままかけて、自分をかいたりどうぶつであらわしたりできてよかった。口ではいえない気持ちを絵にしてみたときは、心が少しおちついた。うれしかったりかなしかったりうきうきしたりして、いろんな気持ちになれた。いろいろな絵をいっぱいかけたとき、こころがはれてうれしかった。

資料4 「お絵かき遊び」の感想（子どもの記述通り）

以上のように子ども達の感想から、「お絵かき遊び」は自分の思いをそのまま描き、楽しく、おもしろく、心が落ち着いたと感じていることがわかる。

2学期と3学期で、自分の気持ちの変化を次のように書いた子どもがいた。

(2学期)

じぶんの気持ちをえにあらわすのはむずかしいと思います。

(3学期)

お絵かきで、自分の気持ちであらわすと、どんな気持ちのときでも、心がいやされました。自分の気持ちを、あいてにつたえられるといい気持ちになりますね。

資料5 女児Cの「お絵かき遊び」の感想（子どもの記述通り）

「お絵かき遊び」を繰り返し実施することで、自分の気持ちを描き表すことが出来るようになり、自分の気持ちも心地よいものになったことを、文章に書き表わせるほど変化したことがわかる。

このように「お絵かき遊び」は、子ども達にとって自分の気持ちと向き合い気付くことができる、良い手立てになるということがわかった。

(2) 子どもの事例から

数回「お絵かき遊び」を実施したことにより、描いている様子に変化が見られた事例を紹介する。

事例1 描くことが不安だったD男

D男は初回るとき、自由に自分の思いを書くことにとまどっていた。何度も「何をかいてもいいの？」と問いかけたり、書きかけると、「ちょっと先生来て。」と呼び、「これでいいの？」と聞いたりした。しかし、4回目以降は楽しそうに自分の描きたい絵を枠いっぱい描き、養護教諭に絵の話をした。

事例2 友達の様子が気になったE子

E子も初回るときは、友だちが書き始めてもなかなか書けず、5分ぐらい経過しても周囲を見渡し、友だちの描いている絵を見ていた。終了時間が近づくと、隣の子どもと同じ絵を描いた。「おしまいです。最後まで描かなくてもいいですよ」と伝えても書き続けた。しかし、回を重ねる毎に周囲の様子を見ることなく描くようになり、9回目には自分の部屋の絵を描き、養護教諭に楽しそうに自分の部屋の絵の説明をした（描画4）。

事例3 形にならない絵を描いたF男

F男は3回目のとき、「描きたくない」といったので、養護教諭は「描きたくないなら描かなくていいよ。描きたい気持ちになったとき、描けばいいよ。」とF男に伝えた。F男はしばらく周囲の様子を見ていたが、形にならない線で自分の気持ちを描いた（描画5）。その描いている様子は、「描きたくない」と言っていたにもかかわらず楽しそうに描いていた。

その後、木曜日の学級活動には参加できなくても、「お絵かき遊び」のために来る養護教諭の姿が遠くから見えると、机の上にある物は全部片付け、クレパスを出して待つようになった。

このように周囲の様子が気になり描けなかった子ども達や、「描きたくない」と自分の思いを伝えることが出来なかった子どもも、自分の気持ちが養護教諭にわかってもらえたとか確かめることが出来た時には、自由に描ける様になった。

(3) 学級担任の感想から

お絵かきをした日としない日の学級の様子の変化は、「わからない」と答えている。しかし、前日に「お絵かき遊び」をする予定を告げると、大変喜び、楽しみにしている子ども達が多かった。片付けが苦手でなかなか次の準備が出来ない子どもも、「お絵かき遊び」のときは早く準備が出来るようになった。

「お絵かき遊び」は、子ども達がほっとして、自分の思いを出せる時間となった。そのような時間を確保できたのが、よかったと学級担任は感じている。

学級担任は養護教諭が行う「お絵かき遊び」に同席し、一人ひとり描いている様子を見てみると、授業では見られないうれしそうな、楽しそうな表情をしている子どもが多いことに気づいた。

次年度も準備物等が整えば、「お絵かき遊び」を実施したいと、終了後の感想に書いてあった。

3. 学級担任と共に子ども理解を深める手立てになるのか

学級担任は、日頃から気になっていた子どもについて養護教諭と交流することで、より子ども達のことを理解でき、対応することができた。例えば次のようなことがあった。

先述した事例3のF男は、学級担任が気にかけていた子どもの一人だった。「絵を描きたくない」と言っていたが、楽しそうに描いている様子を見て、学級担任は授業の時もF男が「したくない」「いや」と言いながらも、与えられた課題をこなし、そのことを褒めるとうれしそうにしていたことを思い出した。そのことから、学級担任に反抗的な言葉をいいながらも、自分の存在を気にかけてほしいというアピールをしていることに気付いた。

養護教諭は、学級担任がF男の心のメッセージに気付いたことを確かめ、気持ちを受け止めたことをF男に伝えるように勧めた。F男は学級担任が自分の思いをわかってくれたと理解した後は、反抗的な言葉を言うことが少なくなり、友達とも仲良く遊ぶ日が多くなった。

4. 実践を通して気付いたこと

(1) 子どもの様子を見て

自由に描くことに不安のある子、周囲の友だちのことが気になる子、絵を描くのが苦手な子は、自由に描いて

も良いと指示されても、何をどのように描くかとまどいがあり、なかなか自分の気持ちに向き合えないことが多かった。また、前日から「お絵かき遊び」の予定を聞いていると、自分の今の気持ちに向き合う前に、何を描くか考えてきて描いている子どもが見られた。しかし、考えてきた絵を描く途中で、今の気持ちを描くように変化する子どももいた。このような柔軟さは、年齢が低い程見られると思われる。

養護教諭は、普段友達と楽しそうに遊んでいる子は、「お絵かき遊び」での絵も一杯に描くだろうと思っていたが、そのような子どもでも、なかなか描けない子どもに気づき、自分が知っているのは、子どもの全てではなく一部であることや、多面的に見て子ども理解を深める必要性を再確認した。これらのことから「お絵かき遊び」は、子ども理解を深めることに役立つといえる。

(2) 養護教諭と子どもとの関係作り

2年生の教室と保健室は他学年に比べると近い場所に位置しており、休憩時間に保健室へ来る子どもの割合は他学年に比べて多い。その中でも特に「お絵かき遊び」を実施していた学級の子ども達は、2学期中頃から頻繁に保健室へ訪れるようになった。

養護教諭の仕事を手助けしたい様子を見せる子どもや、登校時校門で一緒になると、手を振りながら挨拶をする子ども、走り寄って来る子どももおり、養護教諭が自分のことをわかってきている、私の学級を担当してくれている先生のような心理的に近い存在になった。

V まとめと今後の課題

学級で子どもの心を育むことを目指し、筆者らは「お絵かき遊び」を開発し、実践を積み重ねている。本研究は、その取り組みについて1・2年生の担任から要請をうけ、養護教諭が行った実践である。

目的①、1年生に「お絵かき遊び」を実施する方法の吟味については、1年生のひらがな習得までの期間を考慮した描画用紙を用意し、養護教諭と担任が子ども達ひとり一人に対し絵についての聞き取りをしたことで、子ども理解の一助となった。「お絵かき遊び」を始める前の教示も、不安を呈する子どもに配慮して変更した。しかし、子ども達は閉眼しなくても自分の気持ちを感じることができ、それを絵に表す体験をすることができた。

目的②「お絵かき遊び」が子どもにとってどのような体験だったのかについては、子どもや学級担任の感想からもわかるように、子ども達が自分の心を見つめるきっかけとなり、気持ちを自由に絵で表現し、互いに認められる体験になった。この体験を通して、学級集団にも良好な変化が見られ、子どもの心を育むために有効である

ことが確認された。

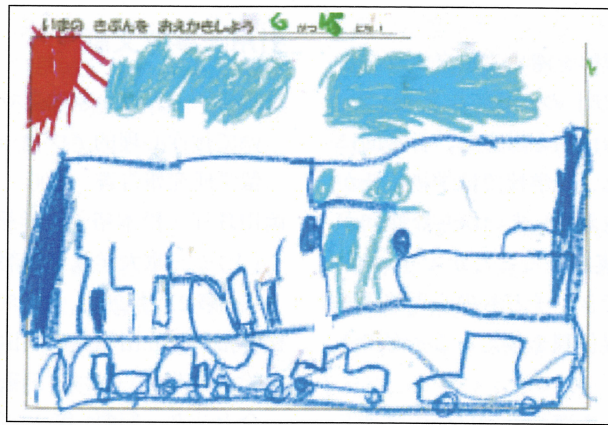
目的③学級担任と共に児童理解を深める手立てになるのかについては、「お絵かき遊び」の取り組みを通して、学級担任と養護教諭が子どもの作品を媒介に、日常的に会話をすることができた。また、小学校では学級担任が1人で学級の子どもの問題を抱えてしまいがちな傾向があるが、養護教諭と協働して実施することができれば、共に子どもの姿を見ることができ、子どもの心理的課題に対して、組織的な指導・支援体制を整えることができると考える。

子ども達が「お絵かき遊び」を楽しみ、自分の気持ちを絵に表現できるかどうかは、年齢が高くなるほど難しくなり、抵抗を示す子がでてくる傾向にある。それは、年齢が高くなるにつれ、自分の描画力や他からの評価を気にするようになり、気持ちを自由に描くことが容易ではなくなることが理由として考えられる。今回の実践でも、2年生では「お絵かき遊び」の時間のために、前日から描く内容を考え予め準備してきた子がおり、前述したような理由か、あるいはその他の何らかの不安を解消するための行為と推測される。しかしながら、低学年の子ども達は自分の気持ちを表すことに抵抗が少なく、描き始めた時の気分によって予め準備したものとは違う内容を描くなど、気持ちの表現を柔軟にできることがわかった。

筆者らはこの取り組みを低学年の時期から継続実施することが有効であると考えている。自分を認めてもらう体験や自分を表現することを積み重ねることで、高学年になっても絵で気持ちを表現することに抵抗が少なくなり、また心理的成長や変化を確認できるので、よりよい支援につながるのではないかと考える。

引用・参考文献

- 松本裕子：お絵かき遊びで子どもの心を育む－学級において行う心理的アプローチの有効性－，2005年度内地留学研究報告書，2006
- 岡田珠江・松本裕子：学級で心を育む「お絵かき遊び」(I)，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，第27号，2007，41-50
- 松本裕子・佐田和美・岡田珠江ほか：学級で心を育む「お絵かき遊び」(II)，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，第27号，2007，141-146
- 松本裕子・岡田珠江ほか：学級で心を育む「お絵かき遊び」(III)，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，第29号，2009，103-108
- 佐田和美・新谷りつ子・岡田珠江：学級で心を育む「お絵かき遊び」(IV)，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，第29号，2009，109-114



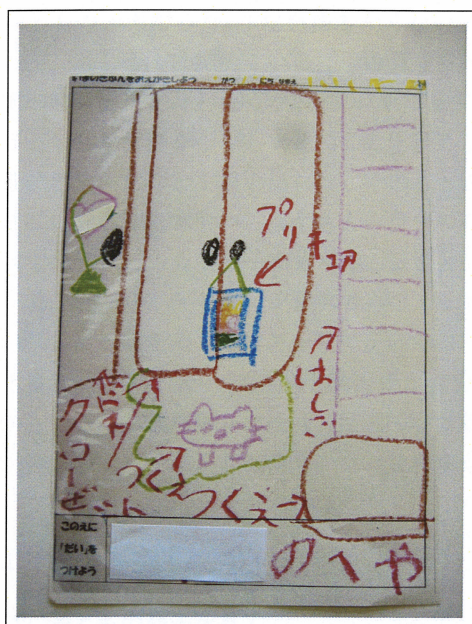
描画1 「お絵かき遊び」用紙 様式2



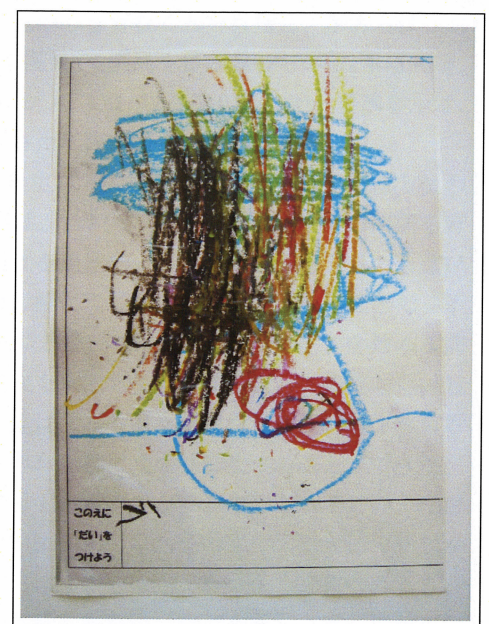
描画2 「お絵かき遊び」用紙 様式3



描画3 「お絵かき遊び」用紙 様式4



描画4 「お絵かき遊び」作品
自分の部屋 (E子)



描画5 「お絵かき遊び」作品
今の気持ち (F男)